

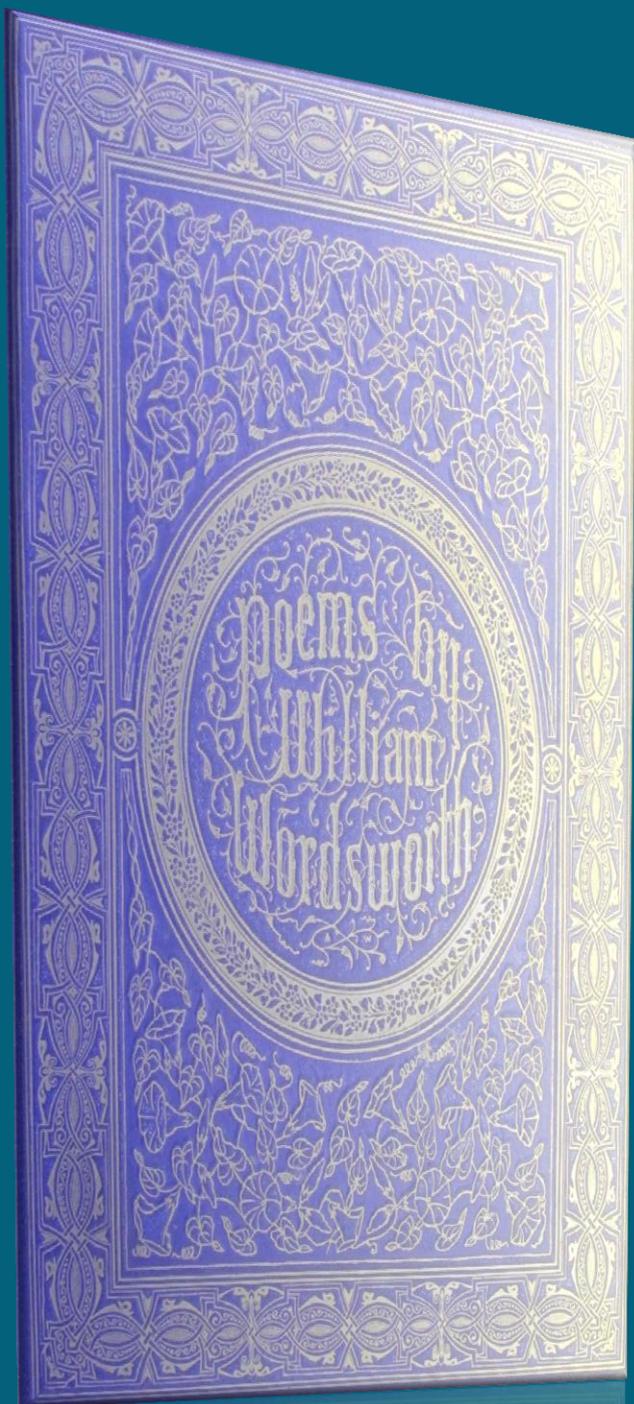
第151回 鶴見大学図書館貴重書展

# 19世紀英国のブックデザイン

—版元製本の美—

会期：1/31<sup>THU.</sup>～3/1<sup>FRI.</sup>

会場：鶴見大学図書館1F エントランス



入場  
無料

## 講演会

テーマ  
「19世紀英国のブックデザイナー」

講師  
渡辺一美（本学文学部講師）

日時  
2/26<sup>TUE.</sup>  
14:00～15:00

会場  
鶴見大学図書館 地下ホール

鶴見大学図書館

230-8501

横浜市鶴見区鶴見2-1-3

TEL 045-580-8274

JR鶴見駅西口下車徒歩5分

京急鶴見駅下車徒歩7分



## ごあいさつ

今回の貴重書展では、鶴見大学図書館が所蔵する資料から、19世紀英国の特徴的な装丁がほどこされた本を展示いたします。

今回の展示のきっかけとなった資料が、エドモンド・キング『ヴィクトリア朝の装飾版元製本 1830年～1880年』(Edmund M. B. King, *Victorian Decorated Trade Bindings 1830-1880: A Descriptive Bibliography*、以下キング)です。この本は大英図書館に勤めていた著者が、装丁家が特定できる版元製本 (edition binding, publisher's bookbinding などと呼ばれる) の図書を目録化したものです。この目録が対象としているのは、英国の出版が大きく変化した時代です。印刷法、製本技術の発展、鉄道網と流通の拡大、識字率の向上、など様々な原因の結果、本の市場が大きく広がりました。読書、あるいは本を買うという行為は一部の裕福な層にだけ許された特権ではなくなり、新たな読者を獲得するために出版社が競いました。そこで重要になったのが、本のデザインです。出版社は装丁のデザインを専門とする芸術家を雇い、趣向を凝らした装丁の本を出版しました。そのような本が、一部は美しい写真とともに、キングで紹介されています。

昨年度ある授業準備のため、キングに収録されている本が、本学図書館の貴重書に含まれていないか調べました。版元製本通りでなく、革装に装丁し直されているものもありましたが、いくつかの資料についてはキングの写真の通りに残っていることを確認できました。また、この時にわかったのは、19世紀英国の出版の特徴の変化を示すことができる重要な資料が、本学図書館には収められているということです。これは、長年にわたって、コレクションの充実に努めてこられた、先生方や図書館職員のおかげと思います。

しかし、資料には残念なことがひとつありました。美しいクロス装の本の多くは、保護用の半透明のパラフィン紙で覆われており、直接装丁を見ることはできません。であれば、貴重書展で展示して見えるようにしよう、というのも今回の貴重書展のきっかけです。この機会に一緒にご覧いただきたいと思います。

今回は装丁をテーマとしましたが、すべての読者がこのような美しい装丁の本で読んでいたわけではありません。これらの本の発行部数は多くて千部台だったでしょう。より多くの読者は、毎月の分冊出版でディケンズの小説を読んだり (最後まで買うと完結する週刊〇〇コレクションのように)、廉価版の恐怖、犯罪小説を読んだり (いわゆるコンビニコミックのように)、あるいはミュージーズなどの貸本屋に会費を払って本を借りたり (現在のサブスクリプションサービスのように)、あるいは文字が読めないので、人に読んでもらって聞いていたのです。展示された資料は、19世紀英国の読書文化のほんの一部であることを、あらかじめお断りしておきます。

また、展示タイトルを「19世紀」としていますが、19世紀末の本は今回の展示から外したこともお断りしておきます。例えば、オーブリー・ピアズリーの装丁が美しい、アレグザンダー・ポウプの『髪盗人』(1896) が本学図書館に所蔵されておりますが、私家版を含めた19世紀末以降の資料は、また別の機会にお目にかけることができればと思います。

文学部英語英米文学科  
渡辺一美

## クイズ

今回展示されている 4, 5, 6, 8, 9, 16 の表紙、背表紙には、装丁した芸術家のイニシャルが隠されています。探してみてください。答えは最後のページにあります。

### 19 世紀初期の本

1. ヘンリー・ロウ 『韻文寓話集』 (ロンドン: J・J・ストックデイル、1810 年)

Rowe, Henry. *Fables, in Verse*. London: J.J. Stockdale, 1810.

長期的な保存に向き見映えがよい、いわゆる版元製本が登場する以前、厚紙で製本されるだけ、あるいは製本されない状態で本は売られていた。購入者は専門の装丁業者に依頼し、装丁師の好み、あるいは自宅の書齋で統一感ができるように、装丁に適した素材とされる革によって製本し直されるのが一般的であった。厚紙の表紙は一時的なものであり、背表紙に著者名、書名などを直接書く、あるいは、この資料のように印刷した紙のラベルを貼ることによって、本が区別されていた。当時の雑誌で 15 シリングの値段だったことが確認できるが、このような簡素な装丁でも、この時代の本は高価なものだった。著者のヘンリー・ロウはサフォーク州の牧師で、他に詩集を出版している。現在ではほとんど顧みられていないが、19 世紀はじめの本の様子を示すものとして紹介する。

2. 『チョーサーのカンタベリー物語』 5 巻本 (ロンドン: W・ピカリング、1822 年)

*The Canterbury Tales of Chaucer: With an Essay upon his Language and Versification, an Introductory Discourse, Notes, and a Glossary by T. Tyrwhitt.* 5 vols. London: W. Pickering, 1822.

革に代わって、長期的な使用に耐えうる布を用いたクロース装を英国で始めたのが、ロンドンの出版社ウィリアム・ピカリングで、1820 年代初めとされる。用いられたのは、綿織物のキャラコで、糊を含んだ染料で色づけされた。紙に代わって布が製本の素材になるが、背表紙に紙のラベルを貼るところは同じである。ちなみに、鶴見大学図書館には、1820 年代に出版されたピカリングの資料が数点あるが、この資料以外は装丁し直されている。厚紙の装丁から、クロース装の時代が始まったが、完全にクロース装に置き換わるには時間がかかったと考えられる。

### ギフト・ブックの流行

3. フレデリック・マンセル・レイノルズ編 『ザ・キープセイク 1829 年』 (ロンドン: ハースト・チャンス、1828 年)

Reynolds, Frederic Mansel, ed. *The Keepsake for 1829*. London: Hurst, Chance, 1828.

デザイン上優れた製本の本が生まれるには、「ギフト・ブック」(gift book)と呼ばれる贈り物用の本の流行が背景にあった。ギフト・ブックは通例年一回発行され、「文学年鑑」(literary annual)とも呼ばれた。ギフト・ブックには、短編小説、随筆、詩、そして最も大事な要素である版画が

多数収められていた。これらの本は、男性から未婚の若い女性に、クリスマスから新年の時期に贈るものとされる。このギフト・ブックの嚆矢とされるのが、1822年11月に出版された *Forget-Me-Not 1823* で、この本の成功を受けて、同様の本が数多く出版されることになった。3の *The Keepsake* は *Forget-Me-Not* の競合本で、1828年版から1857年版まで長期にわたって出版され続けた。3の表紙は厚紙だが、背表紙と表紙の角二箇所<sup>こし</sup>に緑色の革が使われている。また、‘F. Westley, | BINDER, | Friar Street, | -NEAR- | Doctors Common’ と装丁した業者を示すラベル (bookbinder’s ticket と呼ばれる) が裏見返しの下側に貼られていることから、オリジナルの装丁であることが確認できる。

このようなギフト・ブックの出版年には注意を要する。先に述べたように、ギフト・ブックが出版されるのは贈り物のシーズンに合わせた年末である。しかし、年末に出版される本には次の年を標題紙に印刷することが一般的であった。したがって、この資料についていえば、標題紙には1829年と印刷されているものの、実際の出版年はその前年の1828年の年末である。このように年末に出版された本の標題紙に次の年を印刷するという慣例は、出版社にとっては実利的な目的もあった。年の暮れに出版された本は、年が変わると前年の本になってしまうが、新しい年の年号を付けることで、新刊本としてさらに売り続けることができたのである。

適切な資料をご覧いただくことはできないが、3と次の4の資料の間に、装丁技術上大きな変化が訪れた。1820年にクロース装が生まれた後、1830年代と1840年代初めに、クロース装に直接加工をすることで、本の見た目に変化が起こる。一つには、布をプレス機に通して模様を描くことで、もう一つは、背表紙に金箔で文字を入れる箔押しだった。布の加工については、例えば革の装丁に使われるモロッコ革に似せた模様は1830年から使われるようになったことが分かっている。また、背表紙だけでなく、表紙全体に型押しで模様を描き、さらには箔押しで金色の装飾をほどこすことも一般的になっていった。その変化を示すのが次の資料である。

4. ミス・パワー編 『ザ・キープセイク 1854年』 (ロンドン: デイヴィッド・ボウグ、1854年)

Power, (Miss), ed. *The Keepsake 1854. Edited by Miss Power. With Beautifully Finished Engravings, from Drawings by the First Artists, Engraved under the Superintendence of Frederick A. Heath.* London: David Bogue, 1854.

『ザ・キープセイク 1849年』から毎年同じデザインが使われている。クロースにはモロッコ革を模した模様が入っており、その上に箔押しで、ブドウの葉とつるの模様と帯模様を組み合わせたデザインを金箔で描いている。裏表紙も同じデザインだが、箔押しはされていない (in blind と呼ぶ)。装丁のデザインは、ジョン・レイトン (John Leighton) による。レイトンは19世紀英国で最も重要な装丁家で、その長い活動の間 (1845-1902) に、数多くのそして独創的なデザインの装丁を残している。父方に製本業の Leighton Son and Hodge がいたことで、おそらく製本術について知り尽くしており、クロース装の制約の中あらゆるデザインの可能性を実践した芸術家である。

*King*, no. 96.

## 装丁家の時代

ギフト・ブックの市場が確立すると、『ザ・キープセイク』のように毎年末に出版される本だけでなく、様々な贈り物用の本が出版されるようになった。出版社がその豪華さを競う中で、役割を増していったのが、4で紹介したジョン・レイトンをはじめとする装丁を担当した芸術家達である。以下、署名などで確定されている装丁家を紹介する。

### 5. アルフレッド・テニスン 『粉屋の娘』 (ロンドン: W・ケント、1857年)

Tennyson, Alfred. *The Miller's Daughter. Illustrated by A. L. Bond, by Permission of the Author.* London, W. Kent, 1857.

1857年に出版されたものの表紙が青いクロス装なので、後年の再刊の可能性がある。1833年に発表された「粉屋の娘」にA・L・ボンドの挿絵19葉を加えたギフト・ブックである。装丁のデザインはジョン・レイトンによる。

*King*, no. 260.

### 6. アルフレッド・テニスン 『テニスン詩選』 (ロンドン: エドワード・モクソン、1865年)

Tennyson, Alfred. *A Selection from the Works.* London: Edward Moxon, 1865.

次も、ジョン・レイトンがデザインした本である。アルフレッド・テニスンの作品を出版していたモクソンの社主、エドワード・モクソンが1858年に亡くなった後、出版社を引き継いだジェイムズ・バートランド・ペインの新しい企画が、'Moxon's Minuature Poets'のシリーズであった。このシリーズは経営の傾いたモクソン社が、著作権を有するテニスンと、著作権の切れた詩人の作品を出版する企画であり、第一弾の6はテニスン自身が詩を選んでいる。1842年の詩集の挿絵入りの再刊、いわゆる'Moxon Tennyson'は、1857年5月に発売するという失敗をおかしてギフト・ブックのシーズンを逃した。こちらの発売日は、当時の広告によると正しく1864年12月23日に設定された。表紙の周囲はオークの葉、中央はアヤメを模したフルール・ド・リス、真ん中には出版社EM & co.のモノグラムを配し、愛国的な詩が選ばれた内容を反映している。標題紙裏に「木版と表紙はジョン・レイトンのデザインによる」と記されているほか、装丁にはジョン・レイトンの変名、ルーク・リムナー(Luke Limner)の頭文字が署名として入っている。

テニスンは、労働者階級の読者の手に届くように、同じ内容を分冊で出版することを望んでいたが、この小型のギフト・ブックのみが出版されたとされる。しかし、挿絵が最初に付けられたテニスンの肖像のみのギフト・ブックとしては、6シリングとされる値段は高価だった。

*King*, no. 459.

### 7. トム・フッド 『トム・タッカーと小さなボウピープのさまざまな愛情』 (ロンドン: グリフィス・アンド・ファラン、1863年)

Hood, Thomas. *The Loves of Tom Tucker and Little Bo-Peep. A Rhyming Rigmarole. Written and Illustrated by Thomas Hood.* London: Griffith and Farran, 1863.

ギフト・ブックとは異なるジョン・レイトンがデザインした作品で、詩人トーマス・フッドの息子で、一般的にトム・フッドとして知られるユーモア作家が、文だけでなく挿絵も描いている。トム・タッカー（トミー・タッカー）もボウピープも英国の童謡の登場人物。ここでは、ジョン・レイトンは変名のルーク・リムナーを用い、表紙、中央下に署名が見られる。

*King*, no. 423.

8. イソップ 『イソップ寓話』（ロンドン：カッセル・ペター・アンド・ギャルピン、1869年）

Aesop. *Aesop's Fables. Illustrated by Ernest Griset. With Text Based Chiefly upon Croxall, La Fontaine, and L'Estrange. Revised and Re-written by J.B. Rundell.* London: Cassell, Petter and Galpin, 1869.

挿絵を描いたアーネスト・グリセット (Ernest Griset) は、『グリセットのおかしなおかしな世界』 (*Griset's Grotesque*, 1867) で人気が出た挿絵画家で、『おかしな世界』では、7のトム・フッドの詩に挿絵を描いていた。彼は動物画を得意とし、その才能が発揮されたのが8で、こちらもよく売れた本である。表紙の絵は、「狐とコウノトリ」と「犬とその影 (犬と肉)」を描いたものだが、グリセットの挿絵とは異なるし、グリセットの作風とも異なっている。

表紙の絵は装丁を手がけたウィリアム・ラルストン (William Ralston) のものであると考えられる。ラルストンの装丁家としての仕事は長らく忘れられ、イニシャルが一部一致するため、別の装丁家ウィリアム・ハリ・ロジャーズ (William Harry Rogers) と混同されることもあった。しかし、ラルストンは、挿絵入り雑誌『パンチ』や『ザ・グラフィック』にも描いている、有名な画家であった。

*King*, no. 551.

9. チャールズ・マッケイ編 『詩人たちによって描かれた家庭の愛情』（ロンドン：ジョージ・ラウトリッジ、1866年）

MacKay, Charles, ed. *The Home Affections Pourtrayed by the Poets. Selected and Edited by Charles MacKay. Illustrated with One Hundred Engravings, Drawn by Eminent Artists, and Engraved by the Brothers Dalziel.* London: George Routledge, 1866.

初版は1858年だが、この版でも装丁のデザインは同じである。編者のチャールズ・マッケイはスコットランドの詩人で、現在では特に『集団妄想と群衆の狂気』 (*Extraordinary Popular Delusions and the Madness of Crowds*, 1841) で知られている。ギフト・ブックの形式の一つは、挿絵をふんだんに用いた名詩選だったが、著作権切れの詩を利用することで出版のコストが抑えられるという理由があった。

装丁は、アルバート・ヘンリー・ウォレン (Albert Henry Warren) による。後述のオーウェン・ジョーンズの弟子として『世界装飾文様集成』の挿絵作成を手伝ったり、叔父のジョン・マーティンのテムズ河畔通りの設計を助けたりした多才な芸術家であった。

*King*, no. 734. *APB*, no. 244.

10. ウィリアム・ワーズワース 『ワーズワース詩集』 (ロンドン: ジョージ・ラウトリッジ、1866年)

Wordsworth, William. *Poems of William Wordsworth. Selected and Edited by Robert Aris Willmott. Illustrated with One Hundred Designs by Birket Foster, J. Wolf, and John Gilbert, Engraved by the Brothers Dalziel.* London: George Routledge, 1866.

初版は、1859年だが、この1866年版も同じデザインである。9と同じくアルバート・ヘンリー・ウォレンのデザインである。先に述べたように、著作権が切れた著者の作品を出版しなおすことで、出版社は利益をあげることができた。19世紀の中頃にその対象になったのが、ウィリアム・ワーズワースである。今とは異なり、1850年に亡くなったワーズワースの著作権は、1857年に切れ、翌1858年には、挿絵画家として人気のあったマイルズ・バーケット・フォスター(Myles Birket Foster)が挿絵を描いた『ワーズワース詩集』がラウトリッジから出版され、10の元になった。

*Ball*, p. 164. *VIB*, plate 7.

#### クローズ装以外の装丁

11. 『詩編』 (ロンドン: 出版社不明、1861年)

*The Psalms of David. Illuminated by Owen Jones.* London: n pub, 1861.

この本はヴィクトリア女王に献じられているので、表紙の通り『ヴィクトリア女王の詩編』(*The Victoria Psalter*)とも呼ばれる。1861年から分冊で出版され、1862年に11のような装丁で出版されたとされる。おそらくデイ・アンド・サンが出版した可能性がある。

多色石版を用いた印刷と装丁はオーウェン・ジョーンズ(Owen Jones)による。若い頃にスペインのアルハンブラ宮殿で装飾を研究し、そのスケッチを出版するほか、装飾デザインで大きな影響を与えることになる、『世界装飾文様集成』(*The Grammar of Ornament*, 1856)を出版した。彼の出版物は多色刷りであることが必要だったので、当時まだ新しかった多色石版の技術を自ら習得して印刷を行った。その多色石版の技術が11にも活かされている。

装丁については、リリーヴォ(*relievo*)という技術が用いられている。1840年代初めに皮革加工のフレデリック・リークが特許を取った技術で、やわらかくした革に型を押し当てることで表面の装飾を描き、もともとの革の色が変化しないという特徴がある。1840年代終わりから50年代にかけて、中世の装飾を模するため、特にキリスト教に関する本で、リリーヴォを施した装丁の本がいくつか出版された。これらの本の多くは、ジョーンズの手によるものが多い。彼は1851年のロンドン万国博覧会に深く関わったが、工業技術と芸術の融合が11に見られる。

*VBD*, p. 129. *VPBB*, p. 103. *APB*, no. 146.

12. ヘンリー・ノエル・ハンフリーズ 『書体の起源と発達』 (ロンドン: デイ・アンド・サン、1855年)

Humphreys, Henry Noel. *The Origin and Progress of the Art of Writing. A Connected Narrative of the Development of the Art, in its Primeval Phases in Egypt, China, and Mexico,*

*its Middle State in the Cuneatic Systems of Nineveh and Persepolis, its Introduction to Europe through the Medium of the Hebrew, Phoenician, and Greek Systems, and its Subsequent Progress to the Present Day.* London: Day and Son, 1855.

中世の本には彫刻を施した板が表紙として付けられることがあるが、それをまねたのが、ジャクソン社によって特許が取られた、パピエ・マシェ (papier-mâché) という技法である。パピエ・マシェとは砕いた紙と糊を混ぜ合わせたもので、印刷所がステロ版を作るときに使われた素材である。それを型に入れて成形したものが、パピエ・マシェ製本である。素材のため色は必ず黒くなる。手間がかかるので、製造コストを回収するためには、最低千部作る必要があったとされるが、いい方を変えれば、売れる見込みがあれば大量生産できる工業製品であった。

1853年の初版にはクロス装もあったが、13のように第2版も出たということは売れ行きがよかったものと想像できる。著者は、若い頃にイタリアで装飾写本を研究した経験から、装飾、図版が美しい本の印刷を得意としたヘンリー・ノエル・ハンフリーズで、この本では、古代からの様々な言語の文字の歴史について解説している。装丁のデザインもハンフリーズで、表紙には帯模様と植物の模様が描かれ、この時代の中世趣味を表している。表紙に凝るだけでなく、中も多数の多色石版を用いており、初版の価格は1ギニー (=21 シリング) とかなり高価な本であった。

この本は、ラファエル前派の画家、ウィリアム・ホルマン・ハントの『良心の目覚め』(*The Awakening Conscience*, 1853) に描かれていることでも知られる。パピエ・マシェの本は書棚に並べることができなかつたとされ、絵の中でもテーブルの上に置かれている。なぜ、『書体の起源と発達』が描かれているかについては、最近では、ハントとこの絵の妾のモデルのアニー・ミラーとの関係から説明されることが多い。労働者階級出身で文盲のアニーを妻にし、教育を施したいという願いが、この本に表れているということである。他方で、「これらの浮き出し模様の本は、中身がなく無用のもので、[描かれた家具と]同じように新品で、楽しく読書をしたという証のページの折れもない」と評した美術評論家のジョン・ラスキンにしたがえば、絵に描かれる当世風のマホガニーやローズウッドの「圧倒的なまでの新しさ」の家具と同様に、この屋敷の新興中産階級の主の悪趣味さ、ひいては道徳的な退廃を表しているとも考えられる。

*King*, no. 66. *VPBP*, p. 58. *APB*, no. 162.

## 画家による装丁

13. クリステイーナ・ロセッティ 『ゴブリン・マーケットとその他の詩』 (ロンドン: マクミラン、1862年)

Rossetti, Christina. *Goblin Market and Other Poems*. London: Macmillan, 1862.

12と対照的なのが、13の装丁のデザインである。詩人クリステイーナ・ロセッティの最初の商業出版物『ゴブリン・マーケット』に、ラファエル前派の画家であり詩人であった兄のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti) は扉絵と標題紙の絵を描くほか、装丁をデザインしている。直線と小さな円によって構成された簡素なデザインは、同時代の主流のデザインとは全く異なり時代を先取るもので、ジャポニズムの影響が指摘されている。彼は、クリステイーナの次の詩集『王子一代記ほか』(*The Prince's Progress and Other Poems*, 1866)の装丁も

手がけているが、本学所蔵の『王子一代記』はオリジナルの装丁ではない。

*King*, no. 603. *VPBB*, p. 152.

14. クリステイーナ・ロセッティ 『シング・ソング童謡集』 (ロンドン: ジョージ・ラウトリッジ、1872年)

Rossetti, Christina. *Sing-Song: a Nursery Rhyme Book by Christina G. Rossetti. With One Hundred and Twenty Illustrations by Arthur Hughes, Engraved by the Brothers Dalziel.* London: George Routledge, 1872.

クリステイーナの3作目は、出版社探しに難航した。英国のマクミランとエリスに断られた原稿は、米国ボストンのロバート・ブラザーズによって引き取られた。出版前に挿絵印刷では重要なディエル兄弟社によって商業的な成功の可能性が確かめられ、英国ではラウトリッジ社が出版することになる。すでに本の挿絵を辞めていた兄ではなく、兄と同じラファエル前派のアーサー・ヒューズがほとんどのページに付けられた挿絵を担当した。クリステイーナの原稿(大英図書館のHPでデジタル化した原稿が閲覧できる)には彼女自身の挿絵のスケッチが描かれており、ヒューズはそれらを発展させている。その出来映えに満足したクリステイーナは、標題紙にアーサー・ヒューズの名前を大きく印刷するように、ディエル兄弟社に頼んだ。詩と絵が理想的な形で融合した希有な作品で、背表紙と表紙はヒューズの挿絵を元としている。

*Ball*, p. 87.

15. トマス・ヒューズ 『白馬探し、あるいは、ロンドン事務員の長期休暇の漫歩』 (ケンブリッジ: マクミラン、1859年)

Hughes, Thomas. *The Scouring of the White Horse; or, the Long Vacation Ramble of a London Clerk. By the author of 'Tom Brown's School Days.' Illustrated by Richard Doyle.* Cambridge: Macmillan, 1859.

トマス・ヒューズは『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's School Days*, 1857)で知られる小説家で、本作は小説の形式を借りた、バークシャー州の紀行文と地誌である。タイトルの白馬は、アフィントンの白馬の地上絵を指す。挿絵は、『パンチ』や妖精画で知られるリチャード・ドイルが担当し、装丁もドイルによるとキングは推定している。

*King*, no. 30. *VBD*, p. 164.

16. ルイス・キャロル 『スナーク狩り 8章の苦悶』 (ロンドン: マクミラン、1876年)

Carroll, Lewis. *The Hunting of the Snark, an Agony in Eight Fits by Lewis Carroll, with Nine illustrations by Henry Holiday.* London: Macmillan, 1876.

ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, 1872)の次の作品では、ジョン・テニエルではなく、ラファエル前派の画家、ステンドグラスのデザイナーのヘンリー・ホリディが挿絵を描いた。装丁では、きめの粗いクロスに直接印刷をするという珍しい手法が使われ、強調されたコントラストが強い効果を出している。赤いクロスに絵を箔押しした豪華版も出版されたが、16のほうが印象的である。 *Ball*, p. 96.

## その他

17. ウィリアム・ワーズワース 『こどものためのワーズワース詩集』 (ロンドン: アレグザンダー・ストラハン、1866年)

Wordsworth, William. *Wordsworth's Poems for the Young. With Fifty Illustrations by John MacWhirter and John Pettie, and a Vignette by J. E. Millais. Engraved by Dalizeil Brothers.* London: Alexander Strahan, 1866.

1863年に出版された初版は、ジョン・レイトンによる美しい装丁だったが (*King*, no. 429)、この版では全く新しい装丁になっている。デザインは誰によるものか分かっていない。おそらくは、子ども向けの詩集という本来の読者層に合わせて、装丁を変更したものと思われる。3枚の絵は、多色刷りで印刷された紙を表紙に貼っている (オンレイと呼ぶ)。中央の少女は、この本の売りのジョン・エヴァレット・ミレイ (John Everett Millais) が描いた標題紙のヴィネットと同じもの。上の少女と羊の絵は、「手飼いの子羊」(“The Pet-Lam”)についてだが、挿絵とは異なる。下の通りの光景の絵は、対応する詩が不明である。アームストロング・ブラウニング・ライブラリーには、1865年のクリスマスに、詩人ロバート・ブラウニングが知り合いの子どもに送った、同じ版が所蔵されている。つまり、1865年末に再刊された、子ども向けのギフト・ブックであることが分かる。

18. エイリクル・マグヌソン、ウィリアム・モリス訳 『ヴォルスング族とニールング族の物語』 (ロンドン: F・S・エリス、1870年)

*The Story of the Volsungs & Niblungs. With Certain Songs from the Elder Edda. Translated from the Icelandic by Eiríkr Magnússon and William Morris.* London: F. S. Ellis, 1870.

ケルムスコット・プレス設立以前の、ウィリアム・モリスの作品で展示を終える。彼に古ノルド語を教えたマグヌソンと共訳した、アイスランドの伝説である。表紙のデザインはウィリアム・モリス自身と考えられたが、モリスの友人のフィリップ・ウェブ (Philip Webb) とされる。ウェブは、モリスの自宅兼工房「レッドハウス」を設計したほか、モリス商会の壁紙の多くをデザインしている。彼は動物の絵でよく知られ、例えば、壁紙「格子」(Trellis)に描かれた鳥との類似が見られる。

*Ball*, p. 89.

## 参考文献と略記号

- Ball, Douglas. *Ball. Victorian Publishers' Bindings*. London: Library Association, 1985.
- Cheshire, Jim. *Tennyson and Mid-Victorian Publishing: Moxon, Poetry, Commerce*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2016.
- Goodman, Paul. *VIP. Victorian Illustrated Books 1850-1870. The Heyday of Wood-Engraving. The Robin de Beaumont Collection*. London: The British Museum Press, 1994.
- King, Edmund M. B. *King. Victorian Decorated Trade Bindings 1830-1880: A Descriptive Bibliography*. London: British Library, 2003.
- McLean, Ruari, *VBD. Victorian Book Design and Colour Printing*. 2nd ed. Berkeley: U of California P, 1972.
- McLean, Ruari, *VPBB. Victorian Publishers' Book-Bindings in Cloth and Leather*. Berkeley: U of California P, 1972.
- McLean, Ruari. *VPBP. Victorian Publishers' Book-Bindings in Paper*. London: Gordon Fraser, 1983.
- Morris, Ellen K. and Edward S. Levin. *APB. The Art of Publishers' Bookbindings, 1815-1915*. Los Angeles: William Dailey Rare Books, 2000.
- Oakley, Maroussia. *The Book and Periodical Illustrations of Arthur Hughes: 'A Spark of Genius' 1832-1915*. Middlesex: Private Libraries Association, 2016.
- 高宮利行. 「ヴィクトリア朝前期の書物生産における Medievalism: Henry Shaw, Owen Jones, Henry Noel Humphreys を中心にして」 『藝文研究』58 巻, 1990, pp. 188-201.

## クイズの答え

4. 表紙、中央、下にイニシャルの JL を重ねた文字。
5. 表紙、中央の大きな植物の模様の下、中央に JL の署名。
6. 背表紙の'TENNYSON'の Y と N の文字が伸びて、'LL' (Luke Limner)になっている。
8. 表紙、池の水の右手、上に WR の署名。
9. 背表紙、Illustrated の文字の上に A と W を組み合わせた署名 (10 も同じ)。
16. 表紙、裏表紙の絵の左下に hh の署名。